

医療コミュニケーション学に関する新たな教育の試み Education of medical communications for effective treatment

町田いづみ

Izumi Mchida

所属教室 医療コミュニケーション学

machida@my-pharm.ac.jp

1. はじめに

平成 18 年度より薬学 6 年制教育がスタートした。しかし、単に教育期間が長くなれば有用な薬剤師が育つというわけではない。ここでは「社会に必要とされる薬物治療者」となるための新たな教育の導入が必要不可欠である。

さて、明治薬科大学における 1, 2 学年では、教育上の必要性から、基礎科目の講義が中心となるため、当然、臨床に関する情報が乏しくなる。このような状況の中で、一時的であれ、薬物治療を担う臨床薬剤師になることへのモチベーションが下がることが危惧される。そこで同校では、平成 19 年度より、低学年への医療コミュニケーション学講義・演習（選択科目）の導入を試みた。

本稿では、本科目の 6 年制薬剤師教育に対する効果とその位置づけについて検討する。そして、臨床薬剤師育成のための教育を考えるさいの一助としたい。

2. 研究目的

低学年への医療コミュニケーション学講義・演習導入の効果について検討すること。

3. 研究方法

<対象>

*学部 1, 2 年生 69 人

医療コミュニケーション学受講者数=49

上記以外の科目の受講者数=20

*アンケート回収数

教育前配布数 69 回数数 53(回収率 77%)

教育後配布数 49 回収数 49(回収率 100%)

<調査方法>

*研究の承諾を得た学部 1, 2 年生にアンケート調査を行う。

*医療コミュニケーション学を受講した学生「教育群」に対して、計 14 回の講義と演習を行う。

*講義終了後、「教育群」にアンケート調査を行う。

<調査期間>

*平成 19 年 4 月 1 日～平成 19 年 7 月 30 日

<倫理上の配慮>

*調査にあたり紙面にてインフォームドコンセントを行い、アンケートへの回答をもって同意とする。

*アンケート用紙から個人を特定することができないようにするため、アンケートは無記名とする。

<①～⑤回の講義・演習内容>

教育方法：症例から学ぶ

教育目標：「臨床」について感じる・考える

① 講義：医療コミュニケーションとは

演習「傾聴・共感をしてみよう」

② 講義：情報収集の基礎

演習「言語・非言語的コミュニケーション」

③ 講義：治療プランの立て方

演習「友人の休日をプロデュースしよう」

④ 講義：患者心理の理解と対応

演習「障害者心理を体験しよう」

⑤ 講義：薬物治療に必要な情報収集

演習「情報の絞り込みをしよう」

Q.症例 1:患者さんが薬剤師に期待したことは？

がんが告知された。先生からは「手術ができるような状況ではないから化学療法でもやろうか」と言わ

れた。見捨てられたように感じられた。

その後、薬剤師の方が薬の説明に来た。私が抗がん剤治療の話をする、その薬剤師さんは「一番良い薬を考えていきましょう」と力強い声で言ってくれた。そして、今の病気への思いや家族のこと、さらに、生き方についてまでも聴いてくれた。

抗がん剤治療は辛く、恐ろしい程の吐気に襲われた。その度に、いつもの薬剤師さんが来てくれた。くじけそうだった私は元気をもらった。「ひとりじゃない、私には治療と一緒に考えてくれる人がいる」。それだけで勇気が湧いてきた。

Q.症例 2:患者さんに届いたものは？

「私の魂は冷凍庫に入っているみたい」と、寂しそうな笑顔で「孤独感」を訴えた K さん。

<死を前にした K さんとの最後の面接で・・・>

町田さん、私に代わって、Tさんにお礼を伝えてくれませんか。Tさんは、こんな私のところに何度も痛み止めの薬を持ってきてくれたんです。そして、毎回ベッドの横に低く、低く座って、私の目を見ながら薬を渡してくれたんです。そんなTさんの視線からは、「これで痛みが治まるからね。頑張ろうね」って言葉が伝わってきて、凍りついちゃった魂がちょっとだけ暖かくなるように感じられたんです。本当に嬉しかった。だから、ありがとうって伝えて欲しいんです。

Q.症例 3:治療者になるということとは？

夫はこれから大腸がんの手術を受けます。私は祈るような思いで食堂にいました。

そこでは白衣を着た 3 人の若い人が大声で楽しそうに話をしていました。悲しみや恐怖を抱えた患者や家族ばかりがいる病院という場所で、何でそんなにはしゃげるのですか。

その後、手術待合室へ行くためエレベータに乗りました。今度は白衣を着た二人の人が、「東病棟のあの患者、抗がん剤の副作用がひどいんだよ。もうやめればいいのに」と話していました。

何でこんな場所でそんな話ができるのでしょうか。

白衣は患者や家族に安心感を与えてくれるものでした。白衣を着た人はみな患者の味方だと思ってきました。それなのに今私は、その白衣にこんなにも傷つけられています。病院の人は何のために白衣を着ているのですか？

あなたが白衣を着ていなければ、私はきっと傷つかなかっただしょう。

<⑥～⑭回の講義・演習内容>

教育方法:体験から学ぶ

⑥ 演習 I 歯磨き粉を下さい

| 聴覚障害者・精神発達障害児の心身の状況に共感し、対応場面を演ずる。

⑦ 発表

⑧ 演習 II ハンドクリームを下さい

| 身体・心理・社会的情報を収集し、適切な評価—プラン—情報提供を行う。

⑨ 発表

⑩ 臨床薬剤師さんと話そう

⑪ 糖尿病ってどんな病気？（講義）

⑫ 糖尿病患者の薬物治療をしよう

| 基本情報を基に患者から情報を収集し、評価—プラン—情報提供を行う。

⑬ 発表

⑭ まとめ

演習 1:歯磨き粉を下さい

教育目標:患者・薬剤師を体験する

症例:21 歳, 男性/女性(聴覚障害者)

【症状】

口臭と歯茎の腫れ。歯科での治療は終了し、医師からは十分に歯磨きをするように指導された。そこで、何か良い歯磨き粉はないかと探しにきた。

【社会的情報】

歯磨き粉の選択に必要な特別な情報はなし。

【心理的情報】

難聴が理解されることはないと思い、自分で歯磨き粉を探すつもりで店内に入るが、どのような歯磨き

粉が良いのか全く判らず、不安を感じている。

演習 2:ハンドクリームを下さい

- 教育目標: 1.情報収集(身体・心理・社会的情報)
2.状況の評価
3.治療プラン
4.情報提供(効果的な薬物治療)

■以下の情報を収集し治療を行う

症例:21歳 男性/女性

【来局時症状】

1 年位前から急に手荒れの症状が出現。ひび割れがあり、洗髪時や洗濯・掃除のときなど、の洗剤使用時に痛みを感じる。出血や腫れの症状はない。アレルギーはない。

【社会的情報】

2年前より食堂勤務。職場では洗い物が多く、洗剤を使用するが、他に接客の仕事があるため、めんどろで手袋をつけることはなかった。仕事上の変化はない。今年に入ってから、一人暮らしをはじめた。休日は掃除や洗濯をする。風呂場やトイレの掃除には塩素系洗剤を使用するが、手袋を使うことはない。

【心理的情報】

クリームを使いたいが、仕事柄、ぬめりや匂いのきついものは使えないと思い我慢していた。症状出現から、自分には今の仕事が向かないように感じられ、辞めることまで考えている。

演習 3:糖尿病の治療をしよう

- 教育目的: 1.情報収集(身体・心理・社会的情報)
2.状況の評価
3.治療プラン
4.情報提供(効果的な薬物治療)

■事前に提示される情報

患者:山本陽子 38歳 昭和44年3月10日 女性
(2型糖尿病)

- *糖尿病に関する自覚症状なし(市の検診で高血糖を指摘され受診)
- *専業主婦
- *家族:夫と子供(男児小6)の3人暮らし

*嗜好品:アルコール(ー) タバコ(ー)

*アレルギー歴: (ー)

*家族歴:父(糖尿病) *副作用歴(ー)

*病歴:

2006年7月8日 市の検診にて高血糖を指摘される(血糖値:280)

2006年8月9日 初診:HbA1c 7.2% 脈拍 76
血圧 128/86 mmHg 身長 150 cm 体重 68kg
体温 36.6度 食事療法・運動療法にて治療開始
2006年11月8日 再診:HbA1c 6.7% 脈拍 78
血圧 130/88 mmHg 身長 150 cm 体重 65kg
体温 36.4度 食事療法・運動療法にて治療継続

本日 2007年2月8日 受診時(HbA1c 7.3%)
脈拍 78 血圧 130/88 mmHg 身長 150 cm
体重 70kg 体温 36.4度
食事療法・運動療法の継続 薬物療法の追加
処方:グリベンクラミド(1.25 mg) 1T 分1(朝食前)

■以下の情報を収集し治療を行う

山本陽子さん(38歳)女性

- *夫と息子(小6)と3人家族。専業主婦
- *3食は全て自分で作る
- *この間、2回糖尿病教室に参加・病気と合併症の知識はある。
- *薬は定期的に服用していた。
- *食事は指示されたカロリーをきちんと守っていた・・・と告げる。
- *間食にも気をつけていた・・・と告げる。
年末年始の過ごし方に関する質問があった場合
→ 年末年始、1月中は、友人や親戚が集まり飲食する機会が多く、カロリーコントロールへの配慮がなかったことを話す。2月からはきちんとできていると言い訳をする。
- *運動は毎日30分間歩くことを目標にしていると告げる。
実際にできていたかどうかの質問があった場合
→ 特にこの3ヵ月間は寒さを理由にやらない日

が多かった。1週間に1回程度であったことを正直に話す。

4. 結果

1. 教育群と対照群の特徴

教育前の「教育群」と「対照群」間に「薬剤師の仕事に関する質問」10問のいずれにおいても統計学的有意差はなかった。

2. 医療コミュニケーション学講義・演習の効果

教育前後で、「予防医療」と「病気を治すこと」の2項目において統計学的有意差が認められ、両項目ともに「教育後」で高かった(Table)。

Table 薬剤師の仕事と考えるもの

	教育後 N=49 人(%)	教育前 N=93 人(%)	P
①医師の処方箋によって調剤すること	48(98)	33(100)	N.S
②在宅介護者のケアプランを立てること	12(25)	10(30)	N.S
③病気の予防と早期発見をすること	37(76)	7(39)	<0.01
④製剤すること	43(88)	30(91)	N.S
⑤在宅療養の患者の状態観察をすること	5(10)	7(21)	N.S
⑥病気を治すこと	35(71)	10(30)	<0.01
⑦医薬品を管理すること	38(78)	29(88)	N.S
⑧メス・器械を用いて治療処置をすること	0(0)	0(0)	...
⑨プール等の衛生環境検査をすること	15(31)	8(24)	N.S
⑩食生活の指導をすること	11(22)	5(15)	N.S

5. 考察

臨床知識や経験のない学部1,2年生であっても、医療コミュニケーション学講義・演習導入によって、治療者としての薬剤師の認識が育成されることが示唆された。

また、本科目は中高学年へ向けての臨床教育の基礎的役割としての、さらに、入学時の「薬剤師になること」へのモチベーションを維持させる機能をもつことが期待される。

6. 結語

医療コミュニケーション学の教育目標は、①治療者認識の向上 ②効果的薬物治療に必要なコミュニケーションに関する知識/技能の向上 である。

ところで、授業期間内に学生とやり取りした「授業への感想・意見」には、『調剤をするのが薬剤師の仕事だと思っていた』、『普通の薬剤師とは違うのですか?』、『患者さんに必要とされる薬剤師になれるか不安』等々の意見が少なくなかった。

また、「あなたはどんな薬剤師になりたいですか」、「あなたの医療人としての将来の夢は」と題したレポートでは、イメージを明確にできない傾向がみられ、職業的自己同一性を含め、「治療者」となることへの一層の意識の確立が必要と考えられた。

ここでは、教育方法についての工夫が求められるのだが、こうした場面でのマルチメディアを用いた教育はひとつの効果的な方法であろう。

例えば、学生が感情移入しやすい物語を提示し、自己の将来像について考える機会を提供することなどが考えられる。

筆者らはその後、「薬剤師物語」と題したDVDを用いた新たな教育教材の開発を試みた。

今後、この新たな教材を用いた教育効果について検証し、更なる教育内容の向上を目指したい。



研究協力者

伊東明彦 大野恵子 花田和彦
小川竜一 塩見真理